The Society for 17th-Century English Literature
十七世紀英文学会ニューズレター（2024 年度 第２号）
本部事務局　〒577- 0813 東大阪市新上小阪 228-3　近畿大学 B 館 経済学部 2G (金﨑) 研究室内

1. 会長挨拶
2. 2024 年度全国大会のお知らせ
3. 2024 年度総会のお知らせ
4. 懇親会のお知らせ

会長挨拶

岩永　弘人

毎年毎年「記録的」な暑さが続き、この暑さを研究をサボる口実にしてきましたが、今年の暑さもやはり「記録的」で、今年もまた自分の怠惰を暑さのせいにしています。会員の皆様も「命の危険を感じる暑さ」に耐えながら、夏休みを過ごされている事かと存じます。

コロナが一旦収束し日常が戻ってきたのはとてもありがたいのですが、収束してもやはり元通りとはいかないのかなと思う事があります。やはり病は、人類の精神に大きな爪痕を残していった気がします。（論集「十七世紀英文学における病と癒し」（金星堂）絶賛発売中。図書館ではもちろん、個人でもぜひお買い求め下さい。）そして、そこに微妙にインターネットや AI などの急速な発達が絡み合ってきて、人間の感性を蝕んでいっている気がします。教壇に立っていても、それは実感されます。

もともと日本人が英文学を読む意義については、なかなか明確に言語化できないのですが、私はこれを文学の「地域研究」だと説明し続けてきました。ここに共時的な視点を取り入れて英文学を見ることもあり私たちの「十七世紀」という括りもまさにこれかと考えます。
以前はこの説明で８割くらいの人は納得してくれたのですが、今はなかなか難しいと感じています。有り体に言えば、世界が狭くなった、のですが、実際は狭くなった気がする、だけです。その結果文学の源であり、道具でもある想像力がだんだん不要になってきている危機を感じます。言いかえると「文学を読む」と私が教室で発話しても、私のような年寄りが考える「読む」と若い人が考える「読む」は違うような気がするのです。
そういう時代の中、文学の存在意義と面白さを伝えるのは至難の技です。ましてや外国語で文学を読むなど。しかし教室にいると逆の気づきもあります。ある大学で『ソネット集』を読んだのですが、最初の青年貴族の美しさを褒めるあたりで学生から「ルッキズムだ。なぜ外見だけ褒めるのか。」という怒りの反応がありました。「多様性の時代」に文学を教える事の困難さを実感した次第です。一方で、彼ら彼女らの方が２１世紀人として文学を「読んで」いるのかもしれないな、とも思いました。

ご挨拶というより老害会長の愚痴になってしまいましたが、９月の全国大会では発表者の皆様の刺激的なお話を伺ったあと、懇親会で文学教育についてもお知恵を拝借できればと考えています。遠回りでも、そのような議論が当学会の会員を増やす事にもつながっていくと信じておりますので。それでは、当日皆様にお会いするのを楽しみにいたしております。

2024 年度全国大会（第 13 回）および総会のお知らせ

全国大会および総会を関西学院大学 大阪梅田キャンパスにて開催いたします。

日時：2024 年 9 月 14 日（土） 13 時 30 分～17 時 00 分

場所：**関西学院大学 大阪梅田キャンパス 1004 教室**（アプローズタワー**10 階**）

https://www.kwansei.ac.jp/kg_hub/access（「アップローズタワーエレベーター」をご使用ください。HP 下部を参照）

全国大会（第 13 回）プログラム

【開会のあいさつ（13:30～13:35）】 会長：岩永　弘人

【研究発表（13:35～16:45）】

1. 13:35～14:15 司会： 川田　潤（東北支部）

ウィリアム・ペティの教育パンフレット―合理主義、インフラ整備、人文主義のはざまで

菅野　智城

2. 14:20～15:00 司会：伊澤　高志（東京支部）

宮廷仮面劇と王権

田村　真弓

3. 15:05～15:45 司会：西野　友一朗（関西支部）

働き得ぬ辛さ―works を巡るジョージ・ハーバートの詩

西川　健誠

【閉会のあいさつ（15:45～15:50）】 事務局長：金﨑　八重

研究発表要旨

ウィリアム・ペティの教育パンフレット―合理主義、インフラ整備、人文主義のはざまで

菅野　智城（東北支部）

ハートリブ・サークルから出版されたペティの *The Advice of William Petty to Mr. Samuel Hartlib for the Advancement of Some Particular Parts of Learning*（1648）は、伝統的な教養教育や読み書き教育ではなく、観察や実験による体験学習、そして貧民救済を目的とした職業訓練的な実践教育に重点を置いている。ペティの教育パンフレットでは合理的な教育改革案、能力に応じた段階的な教育施設がデザインされているものの、同サークルから出版された、教育の本質的な意義を論じるミルトンの *Of Education*（1644）ほどの影響力をもつには至らなかった（Webster）。しかしながら、科学技術が決定的な地位を確立する以前のイングランド内乱期にあって、職人技術から高等研究にいたる、あらゆるレベルの科学技術の制度の統合、すなわち教育研究のインフラ整備を説いている点において、ペティは先駆的な存在であると言える。

本発表では、知的エリートでもあるペティの教育改革案の合理主義的な内容を検証しつつ、その一方で人文主義的なアプローチの入り込む余地について考察したい。

宮廷仮面劇と王権

田村　真弓（東京支部）

17 世紀のイギリスで隆盛を極めた宮廷仮面劇(court masque)は、その源泉を、仮面(mask)を用いた古代の民衆祝祭に遡ることができる。ヨーロッパに遍在した農業祭式において、仮面をつけた仮装者が近隣を行進したり、死と復活の劇を演じたりして、豊穣を願ったとされる。こうした古代の仮面の祝祭は、季節の周回と生と死の循環にまつわる原初の宗教儀式であった。しかし、ジェームズ一世(James I, 1566-1625)の統治下で、劇作家ベン・ジョンソン(Ben Jonson, 1572-1637)と舞台装置家イニゴー・ジョーンズ(Inigo Jones, 1573-1652)の協力関係により、仮面の祝祭は、豪華な衣装や舞台装置、歌、踊り、音楽といったスペクタクル性を持つ華やかな宮廷祝祭へと大きな発展を遂げた。本発表では、本来、民衆の儀式であった仮面の祝祭が、ステュアート朝の宮廷で、どのようにして王権の発露として機能し、絶対王政の確立と強化に寄与したのかを検証したい。

働き得ぬ辛さ ―works を巡るジョージ・ハーバートの詩

西川　健誠（関西支部）

信仰者の生活において働き/行いは両義的たり得る。聖書は天分を活用し神のため働くよう説く(マタイ 14:19-31 他)一方、救済は信仰に懸かるとも説き（ロマ 3:27 他)、行いに恃む事を戒めるからだ。17 世紀のプロテスタント圏の信仰者にとり、事態はさらに複雑であった。恩寵の強調と一体の行い(works)の意義の否定から出発したプロテスタンティズムは、召命という形での働き(works)に専心する事を救済に選ばれた徴として認めるに至る。では働き得ぬ――少なくとも望むように働き得ぬ――信仰者はどうすればよいのか。

本発表は働き/行いに関わるジョージ・ハーバートの詩を扱う。望む働き場を得ない状態を嘆く詩(“Employment(I)”, “Employment(II)”)も、そういう嘆きに我意への拘泥を認める詩(“Submission”)も、望む通りに働き得ぬ苦悩をキリストの苦悩と重ねて受容する決意を示した詩(“The Cross”)もある。だが最も注目すべきは、受容の決意にも拘わらず、最後まで働き/行いへ拘泥する自らの姿を晒している詩(“The Forerunners”)だ。そこには宗教詩人が陥りがちな綺麗事に陥らないハーバートの誠実が見られる。

2024 年度総会総次第（16 時 00 分～17 時 00 分）

【報告事項】

1．各支部活動報告

2．編集委員会報告

3．2023 年度会計報告（資料は当日配布）

4. 規約の脱字修正報告
5. その他

【審議事項】
1. 住所録整理について
2. HP 委員の任期について
3. 会計監査委員について
4. 全国大会開催地について
5. オンラインジャーナル(年報)の創設について
6. 日本学術会議協力学術研究団体加盟について
7. その他

懇親会のお知らせ

日時：2024 年 9 月 14 日（土）17 時 30 分~ 19 時 30 分
場所：ステーキ&ワイン グリアンテ梅田
大阪府大阪市北区芝田 1-3-1 ギャザ阪急 2F tel: 050-5597-4116
関西学院大学 大阪梅田キャンパスから徒歩 5〜6 分
https://tabelog.com/osaka/A2701/A270101/27110774/
参加費：6,500 円

懇親会出席のご希望は 8 月 30 日（金）まで各支部事務局にご連絡ください。

＊本部事務局：金﨑 八重

＊本部会計：友田 奈津子

＊東北支部事務局：川田 潤

＊東京支部事務局：伊澤 高志

＊関西支部事務局：西野 友一朗

＊学会ホームページ委員：柴田 尚子